The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	本誌の刊行責任を終えて
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 1998, 22, p. 129-135
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61206
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

本誌の刊行責任を終えて

加地伸行

私は、停年の二年前、平成十年三月三十一日付をもって、大阪大学教授を辞職した。と同時に、本『中国研究集刊』の編集・発行の責任も辞した。この機に、これまでの本誌刊行について、また、その周辺のことについて、若干、記録を残しておきたいと思う。

私は昭和五十七年四月に十三年間勤務した名古屋大学文学部から大阪大学文学部に助教授として着任したが、一年後、日原利国教授が京都大学文学部に転任したため、研究室を一人で運営することとなった。

その主な目的の一つは、研究者を養成することである。それは、同研究室に一定の求心性を作ることが求められることも意味した。そこで、その具体的方法として、機関誌を創刊することを決心したのである。

本誌の創刊は、昭和五十九年（一九八四年）である。それまで、大阪大学文学部中国哲学研究室には、昭和二十四年の創立以来、機関誌がなかった。

その編集の精神としては、論文のみならず、すぐれた報告をも掲載してゆくという幅広いものであった。以降、その精神は続いている。

さて、編集はそれとして、刊行において、ただちに問題となるのは、経済的問題であった。率直に言えば、刊行費は私が負担した。私は、その資金作りのために、売文を盛んに行なった。私の売文の意味を知らぬ他人や愚か者が、私の売文の悪口を言っていたことは承知している。しかし、燕雀の悪口など私は歯牙にもかけなかった。たとえば、新人物往来社にいた友人に頼み、『〜の世界』というシリーズを六冊刊行したことがある。このシリーズは、一冊につき約十人前後のメンバーの編成をして、その執筆者の論考を併せたもので、私が編者となった。多数であるので、各人の印税はたいして多くない。しかし、そんなことは大した問題ではない。執筆者の三分の一は、広く日本の学界から選んで私からお願いを——三分の一は、研究室出身者、残りの三分の一は、無名の当研究室の助手・院生という割合である。このことを通じて、私は何人かの若い研究者の

文章表現力をきたえた。私が編著を引きうけた目的の一つがそれである。また、過去の研究室出身者と研究室との関係を一層深めることもその一つであった。

私は、編集料も印税もすべて本誌の資金に投入した。一方、その比率にしても可能なかぎり若い執筆者に稿料がまわるようにした。それは、本誌が順調に刊行されるようになった今も変わらない。たとえば、最新の編著『老荘思想を学ぶ人のために』の場合、若い人の稿料を上げることや、献本代金に回し、私はまったく受け取っていない。そのことは、編集協力者の湯浅邦弘氏や担当編集者の久保民夫氏の知るところである。

形式的には、資金は愚妻の名儀で大阪大学に寄付し、それを「委任経理金」という口座として、大阪大学文学部会計掛に預かってもらったわけである。この「委任経理金」とは、国立大学として正規の予算外で入る研究推進上での金銭（例えば科学研究費補助金など）については、大蔵省にもどさず、大阪大学が預かって使うことができる制度である。

会員は、会費五百円で出発した。その理由は、会費をできるだけ安くし、その代りに多くの会員を得るためである。だから、当初、各大学には献本したため、会費は郵送費にも満たなかった。また、研究室の出身者をはじめ、私の知己・先輩には無料贈呈し、それは相当期間続いた。

もちろん、心ある方が自主的に御寄付下さり、感謝に堪えなかった。また、贈呈ではなくて会費を取れとか、会費を値上げしろと御提案下さった方もあり、有形無形の御支援があった。その御寄付下さった方の芳名は、本誌の月号（一九九一年）編集後記に記録している。

また、刊行について特筆すべきことがある。それは担当のタカラ写真製版のことである。私は学生時代に家庭教師をしていたが、そのときの教え子の秋田幸孝氏が、同社の役員となっていたので、同氏の御好意で、創刊以来、割安の出版費で済んできたのである。これがずいぶんと運営を楽にしてくれた。特に記して感謝申し上げる。

その内、昭和六十三年（一九八八年）から年間に二回刊行することとなった。会費も千円となったと思う。ただし、翌平成元年（一九八九年）から、学術刊行物としての指定を受け、特典として郵便の割引があり、郵送料の負担がずいぶんと軽くなった。

なお、後発の雑誌であるため、今さら一号、二号というのでは、かっこうがつかないと思い、『千字文』を踏んで、天号、地号というふうなナンバーを打つことにし、かつ創刊以来の総ページをも打つことにした。これは今も続いている。

因みに、国立大学の研究室の雑誌刊行の場合、国家予算として与えられる研究費を使うことも可能であったが、私はあえてその方法はとらなかった。と言うのは、その費用分が研究費から差し引かれることとなり、結果的には研究費による図書購入額が減ることになるからである。それは避けたかった。

そこで、経済的基盤を作るため、平成二年に儒教文化研究振興会を興した。本誌月号（一九九一年）の編集後記にそのことを記している。以来、毎年、はじめは約五十万円、しだいに増えて約百数十万円の寄付金（委任経理費）を得て、本誌の運営のみならず、中国語会話の講師費など研究室活動の諸経費にそれを充てることができたのである。ただし、最終的会員は板倉行央氏、浅井光二氏、金根勝氏、渡辺（李）花子氏、王清一氏の五氏である。とりわけ、会長の板倉行央氏には、毎年百万円の御寄付を忝なくし、心より感謝申し上げている。

この儒教文化研究振興会は、私の退職前年の平成八年度をもって解散した。その理由は、同会会員が、私個人との関わりが深く、私が退職して後まで御寄付を乞うては諸氏に対して御迷惑をかけると思ったからである。しかし、同寄付金の残余が相当額であるので、今後の本誌運営の経済的問題は、当分、心配ない。

また、森三樹三郎教授が昭和六十一年に逝去された後、森美佐尾未亡人が、研究室に百万円を御寄付下さった。これは、委任経理金とせず、別して研究室固有の公金としてそのままお預かりしている。一方、平成六年（一九九四年）に、研究室が日本中国学会第四十五回大会を担当（一九九四年の特別号はその記録特集号）したが、その折、諸企業・諸団体に高額の御寄付を忝なくした。その大会のことについては、別に記すべきかもしれないが、おそらくその機会が乏しかろうと思われるので、あえて一筆しておきたい。

この大会の運営費については、儒教文化研究振興会の方々には、お願いしなかった。毎年、援助していただいていて、なおかつということをためらったからである。そこで、大会については、まったく別個の会計とすることで、諸企業・諸団体に寄附のお願いに回ることにした。

おりしもバブル経済がはじけた後であり、非常に苦労をしたが、さすがは大阪の企業である。いろいろな紹介者のおかげで気持よく応じて下さったところが多かった。いや、大阪ばかりではない。横浜や静岡にある、私と個人的関係のある企業も応じて下さった。

方法としては、社員の研修ということで、社会性のあるシンポジウム等を開き、二日間、それに参加する研修費とする。研修費として、一人三万円をいただくことにしたの

である。そこで、学会のプログラムに、工夫をした。会場を大阪大学ではなくて、企業の方が参加しやすいように、吹田市立文化会館（メイシアター）にし、陳舜臣氏らをパネラーとするシンポジウムを開き各新聞社にも声をかけた。朝日、毎日、読売三社は参加した後、記事にしてくれた。

結局、約百五十口（四百五十万円）分の寄附があり（企業・団体等の実際の参加者は約五十名）、運営費に投入した。たとえば、開催日が九月で暑かったので、阪急電鉄ならば吹田駅下車してすぐ前にあるのだが、ＪＲ吹田駅からの場合、徒歩十数分とあって厳しい。そこで参加者をタクシーで運ぶことにした。また、パネリストや会員の老先生の場合、懇親会場までタクシーでお送りした。

寄附にはいろいろな形があった。たとえばアサヒビールからは、二十本入りビールケース三十箱の現物提供を受け、懇親会だけでは使いきれないので、大会会場の休憩所で、二日間の昼食時にビールを無料で出した。その懇親会も、新阪急ホテルが直営のレストランの貸切りをはじめ、破格の協力をしてくれた。また、ビールの残余分はすべて引き取ってくれて精算した。

そのときに得た経験を一つ、特に記しておきたい。学会や学者が企業団体に寄附集めに回るのはよくあることである。しかし、その大半は医理工系や法経系までである。文学部系は少数である。しかし、その少数というところがメリットとなったのである。すなわち、文学部系以外の人たちは、寄附集めずれしているというか、企業・団体としても「又か」という感じのようである。しかし、私のような文学部系の者が、おずおずとお願いにあがると、どうやら、生い生いしいらしいのである。五十面さげた私の顔など、どこをどう見ても娘のような生い生いしさなどないのであるが、頭を何度も下げるというところが、どうも他系の人たちと違う感じを与えたらしい。しかも、シンポジウムのテーマが、「儒教と二十一世紀と」である。この「儒教」が効いた。儒教的催しなら、万に一つもインチキはあるまいという印象を与えることができたようである。このときほど、孔子大明神、儒教さまさまと思ったことはなかった。当時「経営中国哲学」というジョークも飛び出した。

このように大会運営の費用は潤沢であり、全ての精算後、なお百万円の残余があったので、これも委任経理金とせず、別して研究室固有の公金としている。それらは、その他の固有の公金と併せて、研究室の歴代スタッフが整然と管理して今日に至っている。

右は、その大筋であり、本誌は当分の間、従来の委任経理金によって刊行できるので、会費はこのまま持続できる

であろう。いざとなれば、研究室固有の公金の出動も可能であろう。わずか年会費千円で雑誌二冊を頒布できるので、この特長を生かして、むしろ会員の増加を願っている。会員は、現在、約百六十名であるが、二百名が目標である。日本中国学会会員の内、中国哲学関係の会員は約九百人であるから、二百名をもって十分としてよかろう。ただし、本誌は中国研究の成果全般を含むのであって。中国哲学の専門誌ではない。ただ、諸般の事情によって、中国哲学関係の論考が多かっただけのことである。今後は、中国文学や東洋史学の会員が増加することを期待している。

なお、ワープロ等印字機器の発達により、或る時期から、生原稿をフロッピーに収めることとなった。また、執筆者もフロッピーで提出する場合が増えてきた。この、生原稿をフロッピーに入力することや、執筆者のフロッピーを研究室のコンピューターに転換入力する作業は、すべて、助手・院生諸君が献身的に従事してくれた。この協力により、刊行費を抑制することができた。また、面倒な校正や、執筆者との諸連絡、会員・会費の管理や発送など、諸事務はすべて歴代の助手諸君の功績である。記して感謝の意を表する。

研究者を養成する大学院にあっては、研究室の機関誌は依るべき砦である。あるいは航空機を送り出す滑走路である。この機関誌の順調な刊行を可能にするのは、助手の存在である。助手がいなくては、研究室は機能しないと言って過言ではない。ところが、最近の一連の大学改革の中で、国立大学では助手定員が減らされ、助教授定員の助手定員への流用も困難となってきている。これからは中国哲学研究室に助手が配当されるという保証はなくなりつつある。この点が、私には大変気がかりである。

なお、中国哲学研究室の大学院学生・学部学生あるいは研究生の諸君が、発送等に気持ちよく協力してくれたことはありがたかった。彼らの有形無形の協力が刊行の支えとなっていた。と同時に、刊行が、研究室の求心力となっていたことを嬉しく思っている。

さて、右のような刊行事情の他、重要なことは、内容・水準の点である。

率直に言って、私の眼からではあるが、本誌は一級の水準にある。第十号に当る月号（一九九一年）から、巻頭論文方式にした。それまでは、執筆者の論考を類別し、かつ五十音順といった形式的な構成をとっていたが、それを改め、巻頭論文の御執筆をお願いしたのである。田仲一成先生を筆頭にして、毎号、一流の先生の玉稿を巻頭に、かつ第十八号に当る寒号（一九九六年）から岩本憲司先生の連載『春秋經傳集解譯稿』を巻末に、中間に中堅・新人の論

考を載せることによって、体裁が整うこととなった。自己の論考を前記の一流の諸先生と並べさせていただいた新人にとって、これほど名誉なことはない。私としては、無理をお願いした諸先生に感謝の気持ちで一杯である。本誌の地位がそのことによって一層高まったことは言うまでもない。この水準を保つべく、今後も、依頼巻頭論文方式が続くことを期待している。

私が最後に編集したのは、第二十一号に当る往号（一九九七年）である。これをもって私の責任は終った。最後の試みとして投稿論考が登場した。従来は、私が依頼したり、執筆させたりしてきたが、これからは、会員の増加もあり、編集委員会制の導入ということもありうるであろう。しかし、最終的には、やはり中国哲学研究室が責任を持つべきであろう。責任を有する主体となるものがなければ、必ず衰退するからである。主体があれば、どんな困難なことも必ず克服できると私は信じている。

平成十年三月末をもって、私は専門教育を離れた。もちろん、一抹の寂しさがあることは隠せない。しかし、その日はいつか来るのである。私の場合、停年前それが二年早かっただけのことである。

専門教育の場を離れた以上、本誌はもちろんのこと、研究室のことについて、若干の残務整理を除いては一切の口出しはしない。あとは若い人たちにすべてを託した。本誌が若い人たちの協力で一層の発展をしてゆくことを心から願ってやまない。

私は専門教育の場を離れたが、専門研究は続ける。それは当然のことである。私の辞職の意味を研究からの引退と誤解する向きもあるようであるが、浅薄な理解である。これから、私は今までし残してきたことをあれもこれもしたいのである。現在の職務（甲子園短期大学学長）は偶然の所産であり、大阪大学在職時よりもかえって時間的余裕があることが、私の専門研究の継続に寄与するであろう。

その専門研究であるが、研文出版より「加地伸行著作集」として、第一巻『中国論理学史研究』、第二巻『中国思想から見た日本思想史研究』、第三巻『中国学研究論集』、第四巻『孝思想の基礎的研究』を刊行の予定であり、目下、第四巻を執筆中である。そして、可能であるならば、第五巻として、或るテーマの下に書きたいことがある。老骨の非力のため、それは研究的評論となるかもしれないが。

なお、単行本として出している拙著『中国人の論理学』・『儒教とは何か』・『現代中国学――阿Qは死んだか』（以上中公新書）、『史記――司馬遷の世界』・『論語を読む』（以上現代新書）、『孔子――時を越えて新しく』・『孔子画伝』（以上集英社）、『沈黙の宗教――儒教』（筑摩書房）は刷

を重ねているので、今は著作集に入れることを予定していない。だが、あるいは将来、補訂を施して五巻立ての別巻となるかもしれない。

私は活字中毒にかかっており、本を読むことが好きである。しかし書くことはもっと好きである。自分の思考をきたえるためである。それ以外に大して能はない。この二つが〈私の世界〉である。そして少々、映画を観るのが楽しみである。それも、シリアス・リアリズム・ディスカッション・アクション・時代劇の全条件がそろえば、必ず観にゆく。

老人にとって、もはや残る時間はわずかである。私はこれまで他者のために十分働いたと思っている。これからは、自分のために働かせてほしい。その許された時間に〈私の世界〉を自分の思うように求めることを許してほしい。本稿を書いている数日前、最新の拙著『家族の思想——儒教的死生観の果実』（ＰＨＰ新書）が店頭に並んだ。大阪大学を辞職後四個月目の七月、炎暑の三週間、猛然と取り組んで脱稿した。それが〈私の世界〉である。これからそれが続いてゆくことであろう。私にとっては、苦しいものの、楽しい世界である。

これまでの本誌は、私の一つの作品であると思っている。十六年前の創刊号の編集後記をここに再び記して、結びのことばとしたい。

平成十年十月二十五日。

今号は創刊号である。私の今の気持は、荒地にブルドーザーをかけ、やっと一条の滑走路を作ったという思いである。私は、安直に上がって低くしか飛べないヘリコプターを求めない。この飛行場がもっと整備され、やがてそこから、努力を重ねた何機もの若い飛行機が、力強く離陸し、高く遠く飛びたつのを見送るのが私の夢である。